

研究ノート

『かの高貴なる政治の科学』とその後

——バーク研究およびマルサス研究との関連で——*

中 澤 信 彦**

要 約

19世紀ブリテン思想史研究のマスターピースである『かの高貴なる政治の科学』の内容を約説し、本書のバーク研究およびマルサス研究における今日的意義を概括する。

キーワード：スミス；バーク；マルサス；リカードゥ；マーシャル；知性史；政治の科学；立法者の科学、スコットランド啓蒙；推測的歴史；歴史主義；演繹的方法；帰納的方法；経済学の制度化

経済学文献季報分類番号：01-21；02-11；03-40；03-43

I

『かの高貴なる政治の科学——19世紀知性史研究——』¹⁾は原著（英語）が刊行後ほどなく19世紀ブリテン思想史研究のマスターピースとしての地位を認められた。政治思想史・経済思想史・社会思想史研究者にとって必携の書と目されていたが、その文章とロジックの難解さでも有名であり、長らく邦訳が待望されていた。そして原著刊行から22年を経た昨年

*本稿は経済理論史研究会（2006年3月25日、於慶應義塾大学、テーマ「『かの高貴なる政治の科学』とその後」）での配布レジュメに大幅な加筆・修正を施したものである。伊藤誠一郎氏を組織者として開催された当該研究会では川名雄一郎氏が「サセックス学派と19世紀初頭の政治経済学」、山根聡之氏が「バジョットの「政治の科学」と政治経済学」、矢野卓也氏が「ハーバート・スペンサーにおける『社会科学』と政治」と題する報告を行い、私（中澤）と深貝保則氏がコメンテーターを、板井広明氏が司会者を務めた（報告者3人の原稿は<http://anaito.at.infoseek.co.jp/rironshil.htm> からダウンロードできる）。本稿の作成にあたって、研究会関係者各位、田中秀夫氏、壽里竜氏、太子堂正称氏より貴重な助言を賜った。ここに記して感謝の意を表したい。なお、本研究を推進するにあたり、科学研究費補助金・基盤研究（A）「近代イングランドとその近隣英語圏における啓蒙思想と経済学形成の関連の研究」（2004-6年度、課題番号16203013）の交付を受けた。

**関西大学経済学部助教授

E-MAIL: nakazawa@ipcku.kansai-u.ac.jp

URL: <http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~nakazawa>

1) Stefan Collini, Donald Winch and John Burrow, *That Noble Science of Politics, A study in nineteenth-century intellectual history*, Cambridge University Press, 1983. 以下、「本書」あるいは TNSP と記す。

（2005年）によようやく邦訳が出た²⁾。数年前に原書で部分的には読んでいたものの、邦訳公刊を機に全体を精読して、改めて浩瀚な内容に圧倒された。私がこれまでの研究生活で読んだすべての本の中でも十指に入るほどの難解さであったと正直に告白しよう。そんな本書が日本語で（しかも全訳で）読めるようになったのは奇跡的と言ってよい。訳者の偉業に心から敬意を表したい。

本書は「19世紀知性史研究」との副題を持つ。3人の著者はこの「知性史」という言葉を特別な意味を込めて用いている。

わたくしたちが意図した積極的主張は本書の副題に示してあ[る]…。知性史は、一種の「反専門的」特質を持っていると見ていいでしょう。…政治的なるものは、18世紀末および19世紀の知的生活がそこで営まれた「非専門的」空間であった。…わたしたちが取りあげた著者たちが政治的なる「もの」という概念に込めた概念の多様さこそが、まさしくわたくしたちが明るみにだしたかったものなのです³⁾。

そもそも政治の科学は「人間の日常生活に関わることのすべてを包含する総合的な」⁴⁾ 学問であった。「19世紀中にそれは、現在経済学と社会学という半自律的領域とされている領域の多くを包括して」⁵⁾ おり、「歴史と哲学というもっと大きい大陸のなかの境界のない地域により構成されていた」⁶⁾。19世紀ブリテンの代表的歴史家 T. B. マコーリは「あらゆる科学のうちで諸国民の福祉にとってもっとも重要であり、——あらゆる科学のうちで精神を大きくし、元気づけるのに役立ち、——哲学と文学とのどの部分からも養分と装飾とを引き出し、そのお返しにあらゆるものに養分と装飾とを与える」⁷⁾ として、「かの高貴なる政治の

2) 永井義雄・坂本達哉・井上義朗訳『かの高貴なる政治の科学——19世紀知性史研究——』ミネルヴァ書房、2005年。扉の裏ページには本書の原題が THAT NOBEL SCIENCE OF POLITICS と誤記されている。訳語の不統一も散見される。‘maxim(s)’ の訳語は「格律」（プロローグ）、「公準」（第2論説）、「格率」（第6論説）となっており、‘University College, London’ の訳語は「ロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジ」（邦訳80ページ）、「ロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジ」（邦訳141ページ）、「ロンドンのユニヴァーシティ・カレッジ」（邦訳193ページ）、「ロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジ」（邦訳353ページ）となっている（後者は川名氏のご教示による）。また、‘Regius Professor of History’ の訳語として「レギウス歴史学講座教授」（邦訳192ページ）が採用されているが、「欽定歴史学講座教授」とするほうが適切であろう（これも川名氏のご教示による）。

3) *TNSP*, 「日本語版への序」、邦訳 vii-viii ページ。「知性史」の方法に関する包括的で詳細な検討については、川名氏の報告原稿を参照のこと。

4) *TNSP*, p.374. 邦訳320ページ。

5) *TNSP*, p.3. 邦訳4ページ。

6) *TNSP*, p.3. 邦訳4ページ。

7) *TNSP*, p.v. 邦訳i ページ。

科学」を賞賛した。本書の題名はこのマコーリの賛辞から取られている。しかしその「高貴」な科学は「もはや現代の知識地図上には現れることのない学問である」⁸⁾。19世紀における学問の専門化・職業化・制度化の進展の過程で、「政治的なもの」が包含する領域は縮小の一途をたどり、政治の科学は本来の包括性・総合性を喪失していく。個別学問としての政治学・経済学・社会学の独立は、包括的学問としての「かの高貴なる政治の科学」の解体という犠牲を伴っていたのだ。

とは言うものの、本書は「政治的英知の失われた黄金時代の記念祝賀として出されているわけではない」⁹⁾し、伝統的な政治の科学が専門化・職業化・制度化の巨大な波に呑み込まれてゆく悲劇を語ろうとしているわけでもない。19世紀ブリテンの知識人の知的活動を根底から規定し続けた（社会とは区別された意味での）政治的範疇を総体として取り出そうとしている。換言すれば、包括性・総合性を志向する学問的伝統¹⁰⁾の多様で執拗な残存、その豊かな創造力と生命力を描き出すことによって、19世紀ブリテンの知識人たちの知的活動が営まれた言語空間を復元しようと試みているのだ。

日々紡がれてゆく歴史という名の織物のきめの細かさを見ていると、過去がそこかしこで否応無しに見せつけるものは、連続性と伝統というものが持つ巨大で重厚で、抑圧的な力であり、慣れ親しんだものや、昔からのものが深く根をおろし、席を譲ることをしぶりにしぶり、ゆっくりとしか消え去ることのない慣習の姿である¹¹⁾。

本書はこの「連続性」「伝統」「慣習」の残存形態の多様性に焦点を合わせているために、一冊の書物として全体の流れを俯瞰することがかなり困難になっている。本書を難解に感じ

8) *TNSP*, p.3. 邦訳4ページ。

9) *TNSP*, p.7. 邦訳8ページ。

10) その伝統の18世紀における姿を本書は次のように描いている。「政治学についてアリストテレスが「科学の総帥」と述べた意味は、18世紀では依然として生きていた。そしてヒュームが政治学についてその対象は「結びついて社会を作り相互依存関係にある人びと」であると、きわめて単純かつ包括的に述べたのもこの意味においてであった。ヒュームの存命中に、政治の科学あるいは当時のいわゆる立法者の科学を作るころみは、活力と自信を回復し、ニュートン的あるいは経験的方法を道徳分野に応用するというもっと全体的な企ての一部となっていた。当時もその後も、もっとも有効に科学化するにはどうすべきであるかという問題には、二つの基本的な態度があった。一つは多少とも体系的に歴史的証言から得られる教訓もしくは格律を強調する態度である。もう一つは、人間性の恒常的「動機」、すなわち時間と空間を超えてあまり変化しないように思われる心理的性向に注目する態度である。18世紀においては、この二つの態度の併合が重要だと一般に考えられ、歴史上の記録を解釈することの可能な理論として、持続する情念あるいは動機の作用が必要とされた」(*TNSP*, p.14. 邦訳15ページ)。

11) *TNSP*, p.375. 邦訳321ページ。

る最大の原因はこの点に存するように思われる。

II

乱暴になってしまうことを承知で、本書全体を貫くバックボーンをあえて単純に記すならば、政治的知識の研究方法をめぐる次のような緊張関係が指摘できるだろう。すなわち、（政治的知識は人間本性の法則からの演繹によって獲得されるとする）「演繹的・哲学的・公益（功利）主義的研究方法」と（政治的知識は歴史証言の記録からの帰納によって獲得されるとする）「帰納的・歴史的研究方法」との緊張関係である¹²⁾。注意すべきなのは、後者の研究方法が「歴史的」と呼ばれているからと言って、前者の研究 방법이「非歴史的」であることを必ずしも意味しない、ということである。ここでの緊張関係は歴史の理解の方法をめぐる緊張でもあり¹³⁾、それゆえ次のようにも言い換えられうる。すなわち、（歴史過程を前代未聞で先例のないものと捉える）「哲学的・推測的・社会学的・進化論的・決定論的歴史理解」と（歴史過程を閉鎖的循環の連続として捉える）「文学的・物語的・実践的・教訓的・先例的・反復的歴史理解」との緊張関係である¹⁴⁾。前者の歴史理解はスコットランド啓蒙からジェイムズ・ミルを経てスペンサーへと至る系譜として描かれているのに対して、後者の歴史理解はポリュビオスに始まりマキアヴェリ、モンテスキュー、ブラックストン、バークを経てトマス・アーノルド、E. A. フリーマンへと至る系譜として描かれている¹⁵⁾。19世紀を通じて前者が後者を圧倒していったことは事実である¹⁶⁾。結果的にそれは「政治的」範疇の縮小と「社会的」範疇の拡大を随伴した。しかし、先に断ったように、本書の主眼は悲劇を語ることにない。3人の著者はそこに悲劇を見ていない。本書の主たる登場人物であ

12) *TNSP*, p.21. 邦訳21ページ。

13) 「歴史的視角が重要であるという感覚が19世紀思想に浸透していた程度は尋常ではなかった。…歴史的理解が政治的推論にとってあまりにも重要だと見なされた」（*TNSP*, p.185. 邦訳158ページ）。

14) 「実践的歴史家は、なんらかの形而上学や人間本性概念から必然性を演繹する歴史哲学者とは区別される」（*TNSP*, pp.192-3. 邦訳164ページ）。

15) しかも前者の系譜の中には「極端な歴史主義〔歴史的必然論〕対極端でない歴史主義」という緊張関係も走っており、それが本書のストーリー展開をいっそう複雑なものにしている。スコットランドの道徳哲学者および市民社会史家たちは唯物論的歴史主義の「前提条件」（*TNSP*, p.11. 邦訳12ページ）を作ったかもしれないが、彼らは教訓的な歴史理解を全面的に退けたわけではなく、政治的な知識と立法者の決断が歴史の進路に影響を及ぼす可能性を認めていた。その点において、スペンサー流の（極端な）「歴史主義の決定論的拘束」（*TNSP*, p.193. 邦訳165ページ）とは一線を画していた。「極端な歴史主義」においては独自の範疇としての「政治的なるもの」が存在する余地は残されていない。「政治的なるもの」の多様で執拗な残存を主題とする本書においてスペンサーが主たる登場人物たりえない理由はこの点に存するように思われる。

16) 前者は後者を「通俗的歴史利用法」（*TNSP*, p.143. 邦訳121ページ）として嘲笑うに至った。

る J. S. ミル（第4論説）、バジヨット（第5論説）、マコーリ（第6論説）、シジウィク（第9論説）、マーシャル（第10論説）らはいずれも政治と歴史の理解をめぐる2つの基本的態度を統合するべく奮闘し苦悩した知識人として描かれている。それほどまでに包括性・総合性を指向する「政治の科学」の知的伝統は強固であった。3人の著者の本懐はまさにこの強固さを読者に知らしめることに存する¹⁷⁾。

こうした知的伝統の強固さという文脈に照らすならば、マーシャル経済学の方法の「妥協」「折衷」的性格¹⁸⁾にも新しい評価を与えることができる。なるほど、マーシャルは「政治経済学」という名称を放棄して新たにそれを「経済科学」あるいは「経済学」と呼ぶように提唱したし、ケンブリッジにおける経済学課程の独立（トライポスの設置）にも大きく貢献した。それにもかかわらず、彼は政治の科学が本来的に有していた包括性・総合性を決して全面的に放棄しようとしたわけではなかった。彼は経済（科）学がそうした包括性・総合性を代替しうることを期待したのだ。

…マーシャルは明らかに、経済学をその習得に長期間の特別な訓練を要する、高度で精巧な科学に育てようとしていた。しかしまた同じくらい明らかに、かれは、経済学の公的地位がもっと高かった時代には当然視されていた役割、すなわち、簡潔な政策用の金言を経済学が提供するという役割についてははっきりと放棄したのだった。それにもかかわらず、またこの点もジェヴォンズとは違ってマーシャルは、古典派時代の先駆者たちのようには経済学を直線的に「より狭い」あるいは「より純粋な」学問にしようとはしなかった。むしろその逆に、かれの抱いた経済学の構想は、その企図した範囲においては十分に領土拡張主義的であり、また、驚くほど広範囲の社会問題に寄与しうる専門的見識の宝庫として、経済学に独自の地位を約束するものであった。すなわち、もしこの構想が体系的に展開されたならば、経済学は社会科学においてもっとも一般性を持つ、おそらくは唯一の社会科学にすらなっていたことであろう。そしてその途上において、社会学と政治科学が占めていた概念的空間はまったく空っぽになっていたに違いない。しかしながら、このあまりにも気宇壮大な構想にマーシャルの後継者たちはみな戸惑い、職業的体面を保とうとしたかれらはその大部分を放棄した¹⁹⁾。

17) そうした本懐ゆえなのかどうかは詳らかではないが、本書は「政治の科学」の知的伝統とジョン・ロックの政治理論との関連について完全に沈黙している。

18) *TNSP*, p.313. 邦訳270ページ。

19) *TNSP*, pp.312-3. 邦訳269ページ。

このように、19世紀ブリテンの知的世界において、「政治的なもの」は、その概念の範囲を変化・縮小させながらも、知識人の知的活動を根底から強力に規定し続けたのだ。

III

本書は以上の要約だけでは十分に伝えることができない刺激的な論点に満ちている。それらの多くは原著刊行から23年を経た今日においてもその斬新さを失っておらず、さらなる彫琢を待ち望んでいるように思われる。しかし、それらに満遍なく言及することは私の能力を超えるので、私の専門的研究対象であるバークとマルサスとの関わりに限定して本書の今日的意義——その後——を概括し、この小論を結びたい。

まず本書はバークをどのように描いているであろうか？ すでに述べたように、本書において「19世紀におけるバーク主義（バーク的伝統）」は基本的には「文学的・物語的・実践的・教訓的・先例的・反復的歴史理解」の系譜上に位置づけられている。そして、その系譜はすぐれてスコットランド的な知的ジャンル²⁰⁾と目される理論的・推測的歴史の系譜の対極に位置するものとされている²¹⁾。しかし本書が採用した知性史の方法は、「過去の複雑な知的生活を便宜的に統合した一つの話に単純化する」方法を拒絶するものであり、そうした拒絶は本書の直接の考察対象ではない18世紀人バークその人の知的生活を扱うに際しても貫かれている。実際、本書にはバークとスコットランド啓蒙との知的関係をめぐる重要な指摘も散見される。すなわち、「バークはおもにスコットランドからの遺産にイングランド的添加物を混ぜ合わせた」²²⁾のであって、「18世紀終わりの「感情」の観念およびかれのいわゆる「人類の古来の恒久的な感覚」なるもののなかにふくまれている人類の合意という古典的概念との、両方に依拠することができた」²³⁾と。本書が暗示するにとどめたものを私なりに敷衍するならば、次のように言えるだろう。すなわち、バークは（イングランド的な）憲政上の父祖や既存の制度への敬意を（スコットランド的な）人間本性に関する知識と結びつけようとした、あるいは、人間本性という超歴史的なものを「人類の古来の恒久的な感覚」と

20) *TNSP*, p.60. 邦訳53ページ。

21) 対照的に、オルソン『社会科学の出現』(Richard Olson, *The Emergence of the Social Science*, 1642-1792, Twayne Publishers, New York, 1993) は、社会科学史には4つの競合しあう知的伝統——心理学的伝統、社会学的伝統、政治経済学的伝統、官房学的伝統——が存在するとした上で、バークをハリントン、ヴィーコ、モンテスキュー、ド・メストルらと並べて社会学の伝統上に位置づける。「哲学的歴史(社会学)と保守イデオロギーの出現: 1725-67年」と題された第10章で、この社会学的伝統が論じられるが、ハチスン、スミス、ミラーといったスコットランドの啓蒙知識人たちは別章(第11章)に委ねられ、心理学的・社会学的・政治経済学的伝統を融合(fuse)したと評価される。

22) *TNSP*, p.20. 邦訳20ページ。

23) *TNSP*, pp.173-4. 邦訳148ページ。

して歴史化しようとした、と。

次いでマルサスについてであるが、バークの場合と違って本書は第2論説でマルサスについて真正面から論じている。「もっと高次の公準——マルサスとリカードゥとにおける幸福対富——」と題されたこの論説は、いわゆる「リカードゥーマルサス論争」の本質が、政治経済学の方法をめぐる演繹的推論と帰納的推論の緊張関係に起因したわけではなく²⁴⁾、また理論と実際（実践）の緊張関係に起因したわけでもなく²⁵⁾、視野狭隘な新興の政治経済学の主題と普遍的な伝統的「政治の科学」の主題との緊張関係に、すなわち、富と、富以上の異論の余地なくもっと高次で普遍的な政策目標（健康・安楽・安全）との緊張関係に起因したことを明らかにしている²⁶⁾。リカードゥは幸福と富との矛盾の可能性を認めようとしなかった。彼は政治経済学が「政治の科学」に匹敵する普遍性・包括性を持っているとまでは主張しなかったが、「自然的自由の体系はそのまま直線的に実施に移せば、幸福と富とを調和させる」²⁷⁾と信じていたから、彼の政治経済学において矛盾を調整する（幸福と富との最適な割合について決定を下す）べき立法者の出る幕はなかった。また、もし政治経済学の内部で矛盾の可能性をめぐる意見の相違が生じたとしても、視野狭隘な政治経済学の知見から幸福と富の選

24) 「演繹的政治経済学者リカードゥ対帰納的政治経済学者マルサス」という図式は論争の本質に迫っていないとされる。「マルサスはリカードゥの方法と結論に関して疑念を表したけれども、褒めるにせよ非難するにせよ、マルサスを完全な帰納的命題の体现者のようにあつかってはならない。…要するに、政治経済学に等差数列の公差とか等比数列の公比という誤解を与えやすい精密化を取り入れ、両性間の恒常的情念の結果を記すのに「所与の量」という代数学的用語を用いたのは、ケンブリッジの数学者マルサスであった。またおそらくマルサスに特徴的なのは、リカードゥの数学的研究方法に疑問を表するのに、微積分学から取り出される数学的イメージを用いたことである」(TNSP, p.79. 邦訳68ページ)。

25) 「理論家リカードゥ対実際家マルサス」という図式も論争の本質に迫っていないとされる。「マルサスの『人口の原理』は、固有の政治経済学の理論的方法的洗練に関心のない一般の人びとからかれが敬意も悪口も受ける対象になった出版物であるが、一般法則の限界を指摘することに関心を持つ繊細な相対主義者の作とは思われない」(TNSP, p.69. 邦訳60ページ)。「政治経済学は「数学のような精密科学」だというリカードゥの信念は、かれが実践的目的を放棄したことを意味しない。なぜなら、かれがいうように、「政治経済学が有益であるのは、その単純な原理が理解されて、政府を課税において正しい施策に向かわせる場合のみである」」(TNSP, pp.84-5. 邦訳72ページ)。

26) 「『人口の原理』初版でマルサスは、スミスが国富の増大と社会大衆の「幸福と安楽」との向上とを同一視したことを疑問とした。かれがそれを疑問とした章は、「アダム・スミス博士が社会の収入あるいは資本のすべての増大を労働維持基金の増大と考えているのはおそらく誤り」であるということをもっぱら論ずる章である。この章は、スミス以後の、マルサス自身によって開拓された政治経済学にせよ、のちにリカードゥによって開拓された政治経済学にせよ、政治経済学を支配する問題の核心をふくんでいる。…経済成長と生活水準向上とは両立しない状況があるのではないだろうか。/リカードゥはこの問題を自分のものとしたと述べている。しかし、違った理論的回答を与えた述べているであろう」(TNSP, p.73. 邦訳62-3ページ)。

27) TNSP, p.80. 邦訳68ページ。

択問題への助言を導き出すことはできないとした²⁸⁾。しかしマルサスの場合はそういうわけにはいかなかった。彼の経済的論説は幸福と富との矛盾(国民的富の増大にもかかわらず労働貧民が経済的困窮に陥る事態)の可能性を力強く表現したが、それは下層階級の経済的困窮の拡大——それが「食料の高価格に起因するのか、生活保護手当受給者を作り出して「独立」を失わせる生活保護法に起因するのか、一般的過剰生産なのか、あるいは工業都市の生活の不安定と不健康に起因するのか」²⁹⁾に関わりなく——がブリテンの均衡国制への脅威となることを含意したし、しかも彼は国教会の牧師でもあったから、下層階級の困窮・不幸の回避・緩和という政治的・道徳的問題に彼は背を向けることができなかった³⁰⁾。つまり、マルサスの知的活動の基本的枠組みによれば、政治経済学の原理だけでは解決不可能なもっと高次で普遍的な問題に最終決定を下すべき賢明な立法者の出番が残され、それゆえ、(立法者が依拠すべき「もっと高次の公準」を与える)普遍的な科学——すなわち「政治の科学」、スミスの言え「立法者の科学」³¹⁾——の一部門としての政治経済学という位置づけは基本的に堅持された。『『人口の原理』が[第2版から——引用者]もっと学問的な人口学研究書となっても、自然神学も悪徳と美德の道徳範疇もなくなることはなかった」³²⁾理由も、マルサスが『経済学原理』において土地貴族を専制政治に対する防衛装置としてのみならず有効需要の主要源泉としても認めるに至った³³⁾理由も、そのような基本的枠組みに求められるべきである。その意味でマルサスは政治経済学者である以上に「政治道徳家(political moralist)」³⁴⁾であり、彼の知的活動は当時における「政治経済学と政治学との婚姻関係」³⁵⁾

28) 「リカードゥは、多少自覚的に、また自分の教育の不足をきちんと考慮して、考察を政治経済学に、そして政治経済学のうちに限定した」(TNSP, p.69. 邦訳59ページ)。

29) TNSP, p.75. 邦訳64ページ。

30) 「リカードゥはこのような「自由な統治の持続の恐怖」を共有しなかった」(TNSP, p.83. 邦訳71ページ)。

31) スミスの「立法者の科学」の全体像については、以下を参照せよ。Knud Haakonssen, *The Science of a Legislator: the Natural Jurisprudence of David Hume and Adam Smith*, Cambridge University Press, 1981. 永井義雄・鈴木信雄・市岡義章訳『立法者の科学——デイヴィッド・ヒュームとアダム・スミスの自然法学——』ミネルヴァ書房、2001年。

32) TNSP, p.70. 邦訳60ページ。この点において、マルサスの著作はチャーマーズやウェイトリらのすぐれてキリスト教的な政治経済学のための基礎工事を施した、とされる。TNSP, p.71. 邦訳61ページ。「キリスト教経済学」の系譜については、以下を参照せよ。A. M. C. Waterman, *Revolution, Economics and Religion: Christian Political Economy, 1798-1833*, Cambridge University Press, 1991.

33) TNSP, p.84. 邦訳72ページ。

34) TNSP, pp.70, 72. 邦訳60、62ページ。第2論説の執筆者であるウィンチが1996年に公刊した大著『富と貧困』(Donald Winch, *Riches and poverty: An intellectual history of political economy in Britain, 1750-1834*, Cambridge University Press, 1996)の第3部は「政治道徳家としてのロバート・マルサス(Robert Malthus as political moralist)」と題されており、ウィンチの問題関心の継続性・一貫性が伺える。

の一つの典型を表現している、とされる。

このように、バーク思想におけるスコッティッシュ・コネクション、および、マルサス思想における「政治的なるもの」「政治（立法者）の科学」の伝統の継承と変容を示唆したことが、本書のきわめて重要な功績である。著者の一人であるウィンチは、その後の研究において、本書では示唆するにとどめていたこれらの論点の深化・精緻化に精力的に取り組んだ。その取り組みは、論文「バーク＝スミス問題と18世紀末の政治経済思想」³⁵⁾、『マルサス』³⁷⁾、ケンブリッジ版テキスト『人口論』への編者序論³⁸⁾を経て、本文だけで400ページを超える大著『富と貧困』へと結実した。1996年に公刊されたこの大著は、かつて「立法者の科学」の一部門であった「政治経済学」が独立した学問分野へと変貌をとげてゆく過程——その経路は単一ではなかった——を、スミス、バーク、マルサスの3人を主たる登場人物として、知性史の方法で——「立法者の科学」「富と貧困」という概念の多様性を明るみに出すことによって——描き出している。

概して、バークは政治思想界の住民と長らく目されてきたために、その経済思想は政治思想理解にとって付随的なものとして軽視・無視される傾向が強く、他方、マルサスは経済思想界の住民と長らく目されてきたために、その政治思想は経済思想理解に付随的なものとして軽視・無視される傾向が強かった。そうした研究傾向は今も依然として強いと言えよう。しかし、ウィンチが提出した《スミス・バーク・マルサス》の系譜は、そうした研究のあり方の一面性・問題性を浮き彫りにし、バーク思想およびマルサス思想の総体的把握のための根本的に新しい方向性を指し示したように思われる。私は学究生活に乗り出した直後に『富と貧困』と出会い、その新しい方向性にそこはかたない共感——それは必ずしも十全な理解を意味しないが——を覚え、爾来、その系譜を導きの糸として、覚束ない足取りながらも自身のバーク研究とマルサス研究を進めてきた³⁹⁾。しかし、『富と貧困』によって指し示され

35) *TNSP*, p.69. 邦訳59ページ。

36) Donald Winch, 'Burke-Smith Problem and late Eighteenth-Century Political and Economic Thought', *Historical Journal*, 28, 1985.

37) Donald Winch, *Malthus*, Oxford University Press, 1987. 久保芳和・橋本比登志訳『マルサス』日本経済評論社、1992年。

38) Donald Winch, 'Editor's Introduction', T. R. Malthus, *An Essay on the Principle of Population*, Cambridge Texts in the History of Political Thought series, Cambridge University Press, 1992.

39) 拙稿「エドマンド・バークの救貧思想——マルサス・初版『人口論』の時代——」、『マルサス学会年報』第7号、1997年。拙稿「バークとマルサス——脱ラピュータ島のポリティカル・エコノミー——」、中矢俊博・柳田芳伸編『マルサス派の経済学者たち』日本経済評論社、2000年、第1章。拙稿「フォックス派ウィッグとしてのマルサス——初版『人口論』形成史の一断面——」、永井義雄・柳田芳伸・中澤信彦編『マルサス理論の歴史的形成』昭和堂、2003年、第5章。拙稿「初版『人口論』におけるスミス——救貧法批判の方法論的基礎——」、『関西大学経済論集』第53巻第2号、2003年。

た新しい方向性の具体的内容とその意義は、依然として我が国のパーク研究者およびマルサス研究者の共有財産となっていないように思われる。今年2006年は『富と貧困』の刊行から10年目にあたる。これを機にこの大著の再評価の気運が高まることを強く願う次第である。それは、『かの高貴なる政治と科学』の「その後」を真の意味で検証するための、必要不可欠な予備的作業でもあるはずだ。